

遺体に敬意を払う根拠について

林 明 弘^{*1}

要 約

肉体や肉体の欲望を悪と見なす哲学者は古代中世には大勢いた。それは精神に対立するものとみなされ、「自分が肉体を持っていることを恥じる」哲学者が尊敬を受けることもあった。生きている身体についてさえこのように考えるのであるから、まして遺体については何らの顧慮も払わないのは当然である。彼らにとって遺体は石ころと同じ単なる物体にすぎない。魂のない遺体が単なる物体であることにはアウグスティヌスは同意する。遺体がどのような扱いを受けようとも死者の幸福とは何の関係もないからである。しかしだからといって遺体を粗末に扱っても構わないということには同意しない。それは神が遺体が丁重に扱われることを望んでいるという箇所が聖書にあるからである。この理由をアウグスティヌスは次のように説明する。本来どのように扱われても構わないはずの遺体が丁重に扱われることを神が望んでいるという記載が聖書にあるのは、読者にそのような身体にさえも神の配慮が及ぶことに示すことによって完全な身体を以って復活することへの希望を持たせ信仰を強めるためなのである。

序

遺体に対して敬意を払うべきだという考え、遺体を粗末にしてはならないという考えは西洋のキリスト教以前の古典古代世界において普通に認められた考えであった。しかしその根拠は何であったか。Bardy は伝統的儀礼に適った仕方で死者を弔わないと、最後の名誉を与えられなかった死者が生者を苦しめるために戻ってくると異教徒が信じていたからだという Cumont の説を紹介した後で、このような考えを多くのキリスト教徒が受け継ぎ、埋葬されなかった遺体や不敬の手で遺骨がばらまかれたりしたような遺体は復活できないと信じていたと言う。¹⁾

このような考え方をしていたからこそ、多くのキリスト教徒のなかには敵の手にかかって殺されるよりも自ら死を選んだり、強姦されて身体を汚されるよりも死を選ぶ者が跡を絶たなかった。そしてそのような人たちに対して非難するどころか称賛する者が教会の中にも大勢いた。称賛を受けるものが、それを模倣する者を多く生み出すという世の習いによって、自殺や殉教が盛んに行われるという風潮がアウグスティヌスの時代にあった。

キリスト教が自殺を禁じているということはいく知られている。そして自殺を禁じることをカトリッ

クの教義の中で基礎付けたのがアウグスティヌスであるということもよく知られており、しばしば言及される。アウグスティヌスの自殺禁止論の全体について論じる余裕はないので本論において我々は『神の国』一卷で述べられる自殺禁止論の背景にある身体（遺体）観について問題を限定し、それが一方においてキリスト教の復活の教義と結びついており、他方でキリスト教の教義と関係なく人間ならば誰でもが持つ死者への愛惜の情を尊重していることを明らかにしたいと思う。

I 「身体」の意味について

「身体」と訳されるラテン語は corpus であるが、この語は英語の body と同じく感覚の対象となるものを指すので「物体」という意味に使われる場合も多い。身体というのはその特殊な場合、狭い意味での使用ということになる。しかしこの狭い意味の corpus とは何を意味するか。それは異なる機能を果たす諸部分が集まった全体としての有機体を指す。「身体」という意味での corpus は人間に限らず、動物のそれも含めて身体をこのような有機体として捉えているのである。以上は corpus というラテン語の一般的な用法である。

これとは別にアウグスティヌスに、というよりも

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科
(連絡先) 林 明弘 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

キリスト教に固有な *corpus* の用法がある。それは教会を指す。キリストを頭とする体が教会の意味で使われるときがある。この場合の身体とは頭を含まない胴体と四肢を指す。ちなみに「ことばが肉となった」という有名なヨハネ伝の冒頭のことばにおける肉とは *caro* という語であって、これは人間の肉体だけを指すのではなく、肉体と魂が一つとなった人間を指すとアウグスティヌスは解釈する。¹²⁾

このような物体としての身体に生命を与えているのが魂であり、それは生命原理でもある。従って死とは魂と肉体の分離であって肉体と共に魂が消滅するわけではない。このような死についての考えを持つ点ではキリスト教以前の異教徒の哲学者とキリスト教の教父であるアウグスティヌスの考えは一致している。しかし問題となる違いは魂と分離した後の身体をどのようなものとしてに見るかにある。

II アウグスティヌスの相反する論敵

アウグスティヌスが論駁する相手は大別して二つに分けられる。一つは上述の粗末に扱われた肉体が復活できないのではと恐れるキリスト教徒であり、もう一つは死ねばそれで魂と肉体は別々になり、身体はやがて分解して諸部分からなる統一性を持った全体としての身体ではなく単なる物質になるのだから、そのような死後の肉体に何らの敬意も関心も払う必要はないと考える異教徒の哲学者達である。感覚するのは身体という感覚器官を使って魂が感じるのであり、魂と分離した身体はもはや身体ではなく単なる物体にすぎず、痛みやその他いかなる感覚も持たない。(この点まではアウグスティヌスは異教徒の哲学者達と同じ見解を共有する) そのような単なる物体に哲学者たるものあれこれ思い煩うべきではないというのが彼らの主張である。

通常『神の国』においては異教徒の哲学者の方が論敵としては手強いのであり、また異教徒のキリスト教に対する批判に答えるという趣旨が著作の動機でもあるのだが、一巻で論じられる自殺禁止論に限っては強姦されて身体を汚されることを恐れて自殺した女性を讃美する人たちに対しての反論に多くのページが割かれている。既に述べたように彼女たちは汚された身体では復活できないと恐れていたのである。

しかしこの両者に対する反論には一つの緊張、露骨に言えば矛盾があるように思われる。つまり自殺したキリスト教徒の女性を讃美する人たちに対しては、身体をその意志に反して陵辱されることがあったとしても本人の意思の同意が無い限り、その精神はいささかも汚されてはいないのであるから罪をお

かしたことにはならず、復活の可能性がなくなるわけではないとアウグスティヌスは言う。「身体を殺すことはできても、魂を殺すことができない相手を恐れることはない」(マタイ, 10, 28) ののである。ところがこのように言うことはとりもなおさず身体に対していかなる関心も持たず、その遺体に対しては何の敬意も払う必要はないと主張する異教徒の哲学者達の意見をそのまま認めることになるのではないであろうか。異教徒の哲学者達と自殺したキリスト教徒との見解は真っ向から対立するのであるから、一方を批判することは他方を擁護することにならざるを得ないように思われる。

もちろんこれに対しては生きたままの身体が汚されることを拒否するのと、遺体に対して侮辱的な行為が加えられるのに無関心であることとは違うと抗弁することも可能であろう。しかしこのような弁明はこの場合無効である。なぜなら生きた身体であろうと死体であろうと汚されたら復活できないと考える点では一致しているからである。

III 意志に反して身体に加えられる損傷について

アウグスティヌスがこのような矛盾に気づかなかったとは考えられない。我々は以下にアウグスティヌスの議論を少し詳しく追跡してみよう。

アウグスティヌスの根本的な考えは、身体にいかなる暴力が加えられようと、完全な身体を持って復活できるのであるから、そのようなことは少しも恐れることはないという信念である。(12章) だがこの信念が正しいと認められるとしても、だからといって生きた身体に本人の意思に反して加えられる陵辱を歓迎すべきであるとか、無関心でいて良いとかといった結論にはならない。それはやはり望ましくないことであるから、避けるべき事柄であることは疑いない。だが避けるべきだということを認めるからといってそれが直ちに、これを避けるために自殺が良い方法だとは認めることにはならないとアウグスティヌスは論じる。その理由は何か。それは本人の意思に反して身体に加えられる損傷についてのアウグスティヌスの考え方にある。

意志に反して身体に損傷が加えられるのは何も強姦に限らない。アウグスティヌスは、強姦されることも不運な事故に遭って身体に障害を持つようになることも不慮の事故死を遂げることも本質的には同じことだという。この世に生きている限り、人間はみないつでも死と隣り合わせに生きてるのであり、自分の意志に反して身体に損傷を受けたりする危険性は常にあるのである。ではそのような危険性があるからといって、身体に損傷が加えられることを避

けるために自殺することが許されるであろうか。許されるところか合理的賢明な解決であるとさえ誰も思わないであろう。人間はいつどんな死にかた（あるいは殺されかた）をするか分からない。分からないからこそそれは神の摂理であって、ある死に方を避けたいがために自ら命を絶つことは、一つの悪を避けるために別の罪を犯すという悪を行なうことであり、神の賜物である命を粗末にすることであるから許されないのである。

IV 遺体に敬意を払う根拠について

以上は生きている身体に対して意志に反して与えられる損傷についてであるが、それでは遺体に対して加えられる暴力の場合はどうであろうか。異教徒はキリスト教徒の遺体は葬られることなく放っておかれたのではないか、キリスト教の神はそれを許したのではないかといつて非難する。これに対するアウグスティヌスの反論は極めて単純明瞭である。遺体が粗末に扱われたからといって死んだものが不幸になるわけではない。完全な身体を持って復活するのであるからそのようなことは少しも恐れる必要が無いと言うのである。ところがまさにこの考えこそが遺体をどんなに粗末に扱っても構わないという考えを認めることになるのではないかという問題を引き起こしているのである。

我々はなぜ遺体に敬意を払わなければならないのか。死者のためではないとするならばそれは生き残った人間のためという以外は考えられない。アウグスティヌスははっきりと遺体に対する埋葬は死者のためというよりも生者のためにあると言っている。(proinde ista omnia, id est curatio funeris, conditio sepulturae, pompa exequiarum, magis sunt vivorum solacia quam subsidia murtuorum cap.12) だがそれは何の役に立つのか。本論の冒頭で述べたように手厚い埋葬を受けなかった死者が生きているものを苦しめるために舞い戻ってくるからであろうか。だがこのような説明はアウグスティヌスがまさに論駁しようとした考えであり、アウグスティヌス自身の考えと矛盾する。埋葬されなかった死者はそれによって何らの害も受けないのであるから、それを怨んで生者を苦しめる動機が無いからである。それどころかいったん死んだものは生者に対して害を及ぼすことだけでなく何か良いことをしようとしてもできないという考えをアウグスティヌスは聖書に基づいて持っていたように思われる。

ルカ伝16章にある金持ちとラザロの話は死者がある世でどうなっているかについて明示的に書かれている非常に珍しい箇所であるが、それによると生前

放蕩三昧に暮らしていた金持ちが炎の中でもだえ苦しんでいて目を上げると貧しかったラザロは大きな淵を隔てたかなたでアブラハムの懷に抱かれていた。金持ちはアブラハムに自分の苦しみ和らげてくれとを憐れみを請うが拒否される。そしてそれが適わぬと悟ると、次に二度目の頼みをする。自分の兄弟のところへラザロを遣わして自分のようにならないために生活を改めるよう言い聞かせてくれというのがこれもアブラハムに拒否される。「モーゼと預言者に耳を傾けないものは、たとえ死者から生き返った者がいてもその言うことを聞き入れはしないだろう」(31節)というのがその理由である。

この話からはいろんなことが読み取れるがさしあたり我々にとって重要なことは一度死んだ者はいかに悔い改めても手後れで、生きているものに「良かれと思って」何か助言するようなことは許されていないということである。

以上から結論できることは、死者を弔うのは「そうしないと死者が生者を怨んで害を為す」からでもなく、「死者から何か良いことを助言してもらおう」ためでもない。遺体を弔うことが「生者のため」である理由は「死者が生者に何かをするから」ということとは無関係な理由でなければならない。

アウグスティヌスが挙げる理由は大きく二つに分けられると思われる。一つは親しい人の遺体を大切にすることがそもそも人間の本性に適っているからだという理由であり、もう一つは遺体に対する敬虔な勤めが神の御心に適うからだという理由である。

第一の理由は分かり易い。人間は親しい人が亡くなった場合、その人が生前大切にしていた衣類や指輪を形見として大切に保管したくなるという感情がある。衣類や装飾品のような身体から取り外すことができるようなものについてさえそのような感情を持つとすれば、まして人間の本性に属する身体に対しては一層強くそのような感情を持つのが当然である。さらに、義人であって信仰を持つ人の遺体の場合には、それは聖霊がそれを使って善き行いを行なわせた言わば器であるのだから、そのような遺体の場合は最大限の敬意が払われねばならない。第二の理由は神が遺体に対しての配慮をした、あるいは残された人が遺体を丁重に扱ったということを示す聖書の箇所が多数あるということである。このことは神が遺体が粗末に扱われることを望んでおらず、反対に丁重に扱われることを望んでいる証拠であるとアウグスティヌスは言う。しかしこれには問題がある。なぜなら聖書には神が義人や聖者と見做された人たちの遺体が理不尽な扱いを受けたという箇所も多くあるからである。そしてまさにこのような箇所

を根拠にしてキリスト教を非難する人たちはキリスト教の神はそのような人たちの遺体を守ることができなかつたのではないかと攻撃するのである。

これに対してアウグスティヌスはどうか答えるか。聖書に遺体に対する二つの態度が述べられていることについて遺体が残虐に扱われていることが述べられている聖書の箇所はそういうことをした人々の残虐性を語るために、述べられているのであって、神がそれを望んだわけでもないし、防げなかつたわけでもない。そしてそのような扱いを受けたからといって、死者が不幸な目にあっているわけではない、これが一つの答えである。もう一つの扱いについての箇所は神が遺体が丁重に扱われることを望んでいることを示すとアウグスティヌスが解釈していることは既に述べた。しかしなぜ神はそれを望むのかそして望んでいることを示そうとするのか。それはそのような聖書の箇所が「復活に対する信仰を強めるためにそのような敬虔な勤めを喜ばれる神の摂理に死者の遺体も含まれていることを示すため」(ad Dei providentiam, cui, placeant etiam talia pietatis officia, corpora quoque mortuorum pertinere significant propter fidem resurrectionis astuendam cap.13) だとアウグスティヌスは言う。これこそがアウグスティヌスの言う「埋葬は生きている人のためにある」という意味だと思われる。

結 語

遺体が丁重に扱われることを望んでいるはずの神がなぜ粗末な扱いをされることを許すのか。一見矛

盾するように見える二つが両方聖書に記されているのはなぜか。一方で許すかと思えば、他方で丁重な扱いを要求したりしているのはなぜか。上記の簡潔なことばの中にその答えがある。神の摂理は遺体にも及ぶことを示すこと、それがなぜ復活の信仰を強めることになるのか、この問いに対する答えがこれらの疑問にも答えてくれる。

遺体がどう扱われようと死者の幸福や不幸に関係ない。この点を強調すればするほど遺体はどのように扱っても構わないことになると一見思われる。ところがアウグスティヌスはそうではないと言う。アウグスティヌスの論理はむしろこれを逆手に取るような論理である。遺体をどう扱っても死者の幸不幸とは無関係であることを強調すればするほど、逆にそのような遺体であるにもかかわらず神が配慮することがやがて完全な身体を以って復活させてくれるという希望を持たせ信仰を強めてくれるというのである。

以上のように考えてくると遺体から臓器を取り出すこと、ドナーになること、あるいは医学の研究のために献体することは少しも(死者にとって)悪いことではなくむしろ優れた隣人愛の行為であるという考えがキリスト教の伝統に適っているというのは納得できる。遺体を丁重に扱うのは「生きている人のため」なのだから。それは単に人間の身体を機械とみなすデカルトの身体観^{†3)}だけに根拠を持つわけではないと思われる。遺体を単なる物体とみなしどのように扱っても構わないと考えた哲学者はデカルトのはるか以前の古代にも大勢いたのである。

注

†1) 1959 Bobliotheque Augustinienne, 33, Descle De Brouwer., Paris, p772.

†2) De Civitate Dei, 14, 2.

†3) 『情念論』第1部, 第6項.

(平成13年11月16日受理)

On Reason we should Respect Corpse

Akihiro HAYASHI

(Accepted Nov. 16, 2001)

Key words : CORPSE, RESPECT, BIBLE, RESURRECTION

Abstract

Why should we respect corpse? Many ancient philosophers regarded lifeless corpse as mere body like stones. So they had no respect to corpse. Augustine, on the one hand, agrees with them as far as he thinks body without soul is merely body and soul separated from body suffers no effect how much damage we do to body. But on the other hand, he asserts we must pay respect to dead body. The reason Augustine mentions is based on the Bible. In the Bible, there are many descriptions that God desires corpse is treated respectfully but notwithstanding permits it to be treated badly. Augustine says these apparently incompatible descriptions are given in the Bible in order to make solid our faith on Resurrection with perfect body.

Correspondence to : Akihiro HAYASHI

Department of Clinical Psychology, Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.11, No.2, 2001 271-275)